

幼児の音楽教育と評価

(1)

——指導者自身の評価について——



音楽活動や絵画活動は、いずれもその自発性と創造性を尊ばなくてはならないことはいうまでもないが、今日では後者については昔のようにお手本というものが考えられなくなったのに、前者には教則本があつて、いずれはそうしたものの御厄介にならねばならぬという点をどう考えるか。

教育の本質は何か指導者が外部からおしつけることではなくて、子どもの自発性・創造性を遺憾なく發揮させるために助力する这一点にあることは今更いうまでもないことであろう。

絵の場合を考えると二、三歳位の子どもが鉛筆をとってなぐり書きをするのを見かけるであろう。同じことは簡単な楽器、たとえば太鼓のようなものをただ叩いて喜ぶ乳幼児を見かけることであろう。ところが絵の場合は、外界からの教示や模倣はあるにしても、描画、図式画、写実画という発達の道筋が見透されている。さて絵

は幼い時から先生につけるべきかどうかということでは、私はむしろ先生にはつけない方がいいと思つてゐる。

それは私の二人の子どもの経験がそれを雄弁にものがたつてゐるからである。上の姉は幼時からレッキとした洋画家に約一年間写実的な指導をうけた。その結果はたいへん器用にかけるようになったが、(元来そのような傾向があつたのかも知れないが)先生からも非常に望みをかけられていた。しかしその画くところのものは、結局先生の好みがそのまま取り入れられているようにみられた。もつともこの先生は幼い子ども程手を入れられない方針であつたが、そのような傾向はまぬがれなかつた。そして何か小さく早くまとまつてしまふという感じであつた。創造画を自由にかかせる絵画教室でも多くは結局先生の型にとられてしまふのではないかと感ぜられる。弟の方に対しては、姉の経験の反省からいっさい先生につけなかつた。

山 松 質 文

た。ただ好むがままに何でも画いていくというふうであった。時折画きたいと思う時、必要な材料を私が整えてやることはあった。姉の同じ年頃の絵と比べるといかにも子どもっぽくみえるが、明るくて力づくよく、意欲的なものであって、借物ではなく自分のものだという感じである。

この二人がまたバイオリンもやっていたが、姉の方ははじめてでもあったので、かなりきびしくレッスンをやらせたりしたことが、やはり音楽の表現を貧弱なものにさせたようだ。弟の方はこの点に對する反省もあって、強制は極力さけた。例えば、幼稚園にでかける前の十五分間と帰ってからの適当な時間三十分を選んでやっていたが、私がバイオリンを出してきて、調絃しながら「洋ちゃん」と呼ぶ、つかつかとよってくる、「ハイ」といってあごの下へバイオリンを差し出すと、まるで無意識のようにあごで挟む。このように何の抵抗もなくおけいこがはじまるといったふうだった。この頃の演奏は実に充実していたと思う。この私の子どもについての経験からみて、絵でも音楽でも、強制したり、いやいややらせたりすることはもともとよくない。またたとえ好んでやるにしても、絵の場合は模倣的なやり方はまずいということはかなりはつきりした事実である。しかし音楽の場合、模倣というものを頭から否定したらどうであろうか。この頃は子どもの作曲ということが盛んである。このように創造性はうんと高めていきたいものである。どんどん自発的に絵を画く子どもは何の恐れをいだくこともなく、大胆に楽しんで絵をかく。やかましく指示される子どもの絵は萎縮して力がなく、

どうも自分のものになりきっていない。それと同じように、音楽の場合もおとなが干渉したり、非難したりすることがなければ、子どもは自発的にいい気持で自ら大胆に歌うであろう。歌い歌い歌いまくれば自信もでてくるというもの。しかし絵の場合は奔放自在に画くこと自体が勉強になるが、音楽の場合は、自発的にもせよただ太鼓をたたいているだけでは、発達心理学が教える通り、やがて興味を失ってしまう。玩具としての太鼓は結局玩具以上にでない。教材としてのリズム楽器という意味を考えると、それを将来の音楽活動に結びつけて考える必要がある。デタラメにただ叩いているだけでは、遊びとしての興味を失えばもうそれきりである。その興味を更に洗練されたリズム的快感へと発展するためには、何か興味に應ずるような最小限必要な模倣を前提としなければならぬ。絵とちがって音楽の場合はいくとも悪くてもとにかく先生の型にはめる段階が必要なのである。しかし単なる模倣的興味に終らないで最大の創造性を彼の興味の中からめばえさせなければならぬ。それにはただ単に太鼓叩きという何か孤立した興味だけでは発展は望めない。それはある時はお祭りのリズムなどという具体的な生活体験と結びつくことよって地についたものになるであろう。

またもつと根本的には、学習に必要なレディネス(準備)として、家庭に音楽があることが何よりも望まれる。それは単にテレビがありラジオがあるという表面的なことではない。幼い時から、子守唄にもきき、生活の中に浸み通ったような音楽のことである。家庭でコーラスを歌うとか、家族の誰かの興味からたえず名曲が流れ

ているということである。西洋では教会が家庭と結びついているために、自然宗教音楽という形で音楽が家庭に入り込んでいるであろう。日本にはそれが無い。すると日本では意識的にそれを取り入れていくより外はない。家庭に歌う人、ひける人がいなくても大きく人がいればいい、勿論テレビやラジオでもよい。ただテレビやラジオでは、コマージュ以外は一定の曲を意図的にくりかえしきくことができない。音楽の勉強はくりかえしくりかえし聴き、演奏し、歌うことが何よりも肝腎である。家庭に音楽のできる人がいることは最も望ましいが、音楽的に深い造詣をもっている人がいるということも重要なことである。また客観的な事実としては家族員が音楽的才能テストに優秀な成績を示すということである。私が幼稚園児のリズム再生テスト（小生考案のもので、実験者がハンドカスターであるリズム・パターンを打つ、ひきつづき子どもに同じくハンドカスターでそれを模倣して再生させるテスト）と家庭の音楽的環境との相関を X^2 検定で求めたところ、結局有意差は、本人が家庭で正規の音楽のレッスンを受けているかどうかということにかかわり、家にピアノがあるとか、家族の中に歌をよく歌う人がいるとかいうようなことだけではわからなかった。また別の調査では、親が音楽的才能テストに優秀な成績をおさめたものは、子どももまた概して優秀であった。また親の音楽的造詣の深さも子どもの音楽的才能と密接な関係がある。

私はこれらの事実から、子どもの音楽の評価成績は指導者のそれに正比例するものであり、従って子どもの音楽の評価は先ず指導者

自らの評価からはじめられねばならないと考える。ところが指導者が自分自身をテストされ評価されるということは、あまり好むところではないにちがいない。しかし、自分を知らなくて、人を指導することは不合理なことではなからうか。主観的に自分を評価することは誰でもやっていることである。その評価には過大評価もあれば、過小評価もあり、いずれも正しいものではない。

ここでおとなの音楽的才能の評価法の基礎的なものとして先ず音楽的才能テストをあげてみよう。最も有名で私の見るところ最も客観的で、妥当性（テストのねらいにかなっている程度）も信頼度（何回テストしても結果が似ている程度）も高いと思われるものにシーショアの音楽的才能テストというのがある。このテストは、我々の聴きなれた楽器の音ではなくて、機械的電氣的にオッシレーターによって再生された音（ある問題だけハモンドオルガンを使用）による。アチーブメント・テストではなく素質をみるテストであるから、特にこの配慮がなされているわけである。だから音楽を勉強しているものがよい成績をとり、していないものが悪い成績をとるとは限らぬ。次に私の調査したある家系では、相互にイトコ同志である姉妹と兄弟を比較すると、一方の姉妹の方は職業的音楽家を母にもち、幼時から始めて約二十余年間専門の音楽の勉強をしてきたし、二人とも米国に留学までしたのであるが、他方の兄弟は、前記母親の兄を父親にもっているが、この父親は若い頃趣味的にピアノを弾いた程度で、本人達は学校の正規の音楽以外には格別音楽学習をしたことがないという。音楽的才能テストは前記の母親もこの

父親も優秀だが、母親の方が優れている。また配偶者はいずれも並程度であった。この二組は音楽的環境としては雲泥の差がある。もし音楽的才能検査成績が音楽を学習することによって向上するものであるとすれば、この場合は最も顕著な差がでてくるはずである。しかるにこの両者の成績は全く伯仲しているのである。このようにしてこのテストが音楽的素質をみるものとして妥当であるといえるであろう。また信頼度においても決して低くない。このテストは、高低判断、強弱判断、長短判断、音色判断、リズム判断、音記憶と六種類のテスト・バッテリーからなりたっている。高低判断は最高十七振動、最低二振動の差（専門家をテストする場合は最高一振動の差）を有する二つの純音を比較して判断する間からなりたっている。これはバイオリンのような微妙な音の高低をつくりだす楽器をあつかう人および自分から声をつくりだす声楽家にとつては極めて必要だが、ピアニストのような音が固定していて、ただ叩けば特定の音がでる楽器を扱う人は高低判断に特に敏感である必要はない。現にピアニストは必ずしもこの成績はよくはないのである。だからそのような楽器を扱う場合にあつてはあまり成績を気にする必要はない。私の調査では、高低判断は日本人は米国人に比し非常に劣っていることがわかった。次に強弱判断、これは音楽をきいたりする上には問題かもしれないが、演奏や作曲にはあまり問題ではない。何故かというにそこで必要とされるのは表現としての強弱であるからである。長短判断は音の長短の比較であるが、これは日本人の得意とするものであることが、私の調査で明らかとなった。日本

の音楽が問の音楽であることが若い世代のものにも伝統として浸みこんでいるのではなからうか。音色判断、これは倍音を附加するかと、除くかによって音色が変わるが、その違いを比較判断させるもので、違うか同じかを答えさせる。バイオリンのごとく調絃を要する楽器を取扱う場合特に必要とならう。その他の場合の必要度はどの程度であるか不明である。これも日本人はかなり劣っている。次はリズム判断、二つのリズム・パターンが同じであるか違うかを判断するもので、いままでの四つのテストが比較的要素的であったのに対して、総合的でやや複雑化したものであり、次の音記憶判断とともに最も重要なテストの一つであると私は考える。これは一般には日本人は米国人に比し劣るが、私の調査では小学生のみは日本人の方がかえって優れている。これは最近我が国の幼稚園をはじめとして音楽教育がぐつと向上し、特にリズム教育が成功したのではあるまいかと思つてゐる。だから長い年月の間によほど大きな変化があつたとみてよからう。最後に音記憶テストだが、二つの同数ずつからなる音系列をきかせ、何番目の音高がちがっているかを当てさせるもので、一か所だけが違うようにしてある。高低判断を形態記憶の形でテストするものである。音記憶は、シーショア自身も重要視したし、次に述べるドレイクは特にこれを重視した。日本人はこれが甚だ劣るのである。リズム判断と音記憶の二つが優秀ならば、他をみる必要がない位である。リズム判断がわるいとダンスなどがうまくいかないし、音記憶がわるいと音楽活動全体にひびく。

次はドレイクの音楽適性検査で、リズム・テストと記憶テストか

らなりたっている。リズム・テストはある等間隔の打音に合せて、

一、二、三という掛声をきかせる。四番目からサイレントになり若干時間の後にストップをかける。それで頭の中で、一、二、三、四、五、六……とはじめの掛声から勘定をはじめサイレントのところもひきつづき数えストップまで勘定する。正確な答からのズレで成績をきめるものである。次は記憶テスト。ドレイクは音楽的才能の基本は音楽の記憶力であると考えるのである。これは短い音楽のフレーズをピアノで演奏する。ひきつづき同じようなメロディーを、調を変えるか、特定のところだけ音符の長さをかえるか（つまりリズムを変えるか）、特定の音の高さを変えるか、全く同じにするか、さまざまな演奏を次々ときかせ、常に最初の標準メロディーと各々を比較させ、誤りの数を調べるもの。これは小学校二年位からできるようになっていくが、日本人にはとても無理でおとなでも音楽的知識が殆んどない人にはむづかしい。だから、極めていいテストだと思うが、ある程度の音楽的知識を必要とするので、純粹に音楽的素質をみるものであるかどうかは疑問である。が、この成績の優秀なものはやはり音楽的に優れている。シーショアと併行して実施すればよいと思う。（いずれも日本には原盤が殆んど入っていないが、シーショア・テストおよびドレイク・テスト共に原盤のコピーを私がかもっているのので、関西の方で、ある程度まともなお申込み下されば、いつでもテストしてさし上げます。）

この外紙数の関係上省略するが、クバルパッサー・ダイクマのテストというのがある。これには音楽の味わいのテストなど鑑賞的な

要素をも含めている。

まあこんなテストがあることを御存じの上で、できれば受けてみられるとよいと思う。そして自分の長所短所を知って、長所はますますのばし、短所はつとめて補償するようにしたい。音楽的才能というものは生れつきのものだとあきらめる必要はない。現に私が双生児について行なった結果では、少なくとも中学生位の年齢にもなれば、素質規定度より環境規定度の方が比重が重くなっている。つまり中学生ともなれば、その示すところがその年になるまでの環境の影響を大きくうけているであろう。また好きこそもの上手なれとのことわざにもある通り、努力することは何よりも肝腎であり、パッハ自身自分の音楽的才能は結局努力の賜物であるといっているし、米国のある人は音楽的才能検査に忍耐力検査というものを加えているし、私の調査事例からも、努力することの重要性を痛感させられた。また指導者は子どもを評価する前に自分を正しく評価すべきであると思う。このことは単に音楽に限ったことではなく、自己を先ず受け入れる人にしてはじめてよく児童をうけ入れることができるのだという認識と体験がなければならぬと思う。そうでないとは結局評価のための評価に終り、評価が教育活動の中の融合的部分となることできないと思う。

次回から子どもの音楽的才能の発達と評価の問題へと発展させたいと思う。

* * * (大阪市立大学)